

## レファレンス・コーナー -- チャベスとベネズエラ (ブックシェルフ)

著者	村井 友子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	158
ページ	49-49
発行年	2008-11
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.20561/00046823">http://doi.org/10.20561/00046823</a>

## レファレンス コーナー チャベスとベネズエラ

村井友子

日本人にとって比較的なじみの薄い南米の国ベネズエラが、近年日本のメディアで度々取り上げられるようになった。その背景に、国際舞台での強硬な反米・反グローバリズム発言、キューバのカストロ議長との親交等で世界の注目を浴びるウーゴ・チャベス第五代大統領の存在があることは言うまでもない。

チャベスは、一九八〇年代に推進された新自由主義経済改革、民主行動党とキリスト教社会党との二大政党制、富裕層と中間層に独占されてきた石油収入の恩恵等に不満を持つ貧困層の支持を受け、一九九九年に大統領に就任した。以降今日までの約一〇年間、ポリバル新憲法の制定、大統領権限の強化、一院制への移行、キューバ人医師の大量受入、農地改革、為替管理、統制価格の導入、石油公団(PDVSA)への統制強化など、一連の政策を次々と実施してきた。チャベスはこの政策路線を南米諸国独立の英雄シモン・ポリバルの名をとってポリバル革命と呼ぶ。この強烈なカリスマと行動力を持つ政治家チャベスの影響もあり、世界

中でベネズエラ関係の書籍が刊行されてきた。本稿では、チャベスと同政権下のベネズエラ社会を知る手がかりとなる和文図書を紹介したい。

最初にチャベスを敬愛するラテンアメリカの左派知識人によるチャベスへのインタビューを纏めた二冊を紹介する。ウーゴ・チャベス+アレイダ・ゲバラ著、伊高浩昭訳『チャベス+ラテンアメリカは世界を変える!』(作品社 二〇〇六年)は「チェ・ゲバラの娘で、小児科医としてラテンアメリカやアフリカで医療活動を行うアレイダ・ゲバラによるインタビューを収録したものである。この中でチャベスは自らの生い立ち、指導者となるまでの思想形成過程、二〇〇二年四月の軍事クーデターの顛末、社会変革や国際情勢等について率直な語り口で答えている。マルタ・ハーネッカー著、河合恒生・河合麻合子訳『チャベス革命を語る』(澤田出版 二〇〇七年)はチリ人としてアジエンデ時代のチリ革命を経験し、その後、ジャーナリスト・研究者としてキューバを拠点に活動するマルタ・ハーネッカーによるインタビュービューである。同氏のインタビューは、好意的な質問に止まらず、チャベス政権と緊密な関係にある軍隊、チャベス政権から離反する左翼政党や左派知識人、推進する経済モデルの問題点についてなどを多分に批判的な質問も含まれている。

次に、チャベスの演説・記者会見を収録したものに伊高浩昭翻訳・解

説『ベネズエラ革命—ウーゴ・チャベス大統領の闘い—ウーゴ・チャベス演説集』(MNZ 二〇〇四年)がある。饒舌で銜学的な演説の中に、チャベスの政治的メッセージが満載され、貴重な一次資料といえよう。

日本のジャーナリスト・研究者による単行書には、本間圭一『反米大統領チャベス—評伝と政治思想』(高文研 二〇〇六年)、新藤通弘著『革命のベネズエラ紀行』(新日本出版社 二〇〇六年)、河合恒生・所康弘『チャベス革命入門—参加民主制の推進と新自由主義への挑戦—(ベネズエラのたたか1)』(澤田出版 二〇〇六年)がある。三冊ともベネズエラの概要、チャベスの生い立ち・政治思想、ポリバル革命が目指す方向性等を解説したものである。

この他、単行書の一章で、ベネズエラを扱っているものに、小池康弘編『現代中米・カリブを読む(異文化理解講座8)』(山川出版社 二〇〇八年)がある。同書は中米・カリブ諸国理解のための入門書である。ベネズエラは南米の国だが、カリブ海に面しており、第二章で坂口安紀が「苦悩するベネズエラ—チャベス政権の『ポリバル革命』の行方」を執筆している。チャベス政権誕生の背景、ポリバル革命の政治・経済的側面、チャベスの思想的背景、同政権の歴史的意義について論じている。坂口は、制度的には参政権を持ちながら、事実上政治から排除されてきた大衆層の政治参加を進めたと

いう点で同政権に一定の評価を示しつつも、高止まりする国際石油価格に支えられた政治・経済政策が持つポピュリスト的性格、石油の収益が激減した際、これまでに蓄積されたマクロ経済の歪みと各生産活動の非効率性が、ベネズエラ社会に大きな経済的ショックをもたらす危険性に警鐘を鳴らしている。

最後にベネズエラを扱った異色の書として、石橋純著『太鼓歌に耳をかせるカリブの港町の「黒人」文化運動とベネズエラ民主政治』(松籟社 二〇〇六年)を紹介したい。本書は著者の博士論文をもとに書き下ろしたもので、ベネズエラ北部のカリブ海に面した港町プエルト・カベージョの一区区サン・ミジャンを舞台とし、同地域に住む黒人系アーティストが、地域の伝統音楽である太鼓歌(タンボール)の宴を守るために組織した地域文化復興活動に焦点をあてている。本書の第八章「石油国家」の近代化とベネズエラ型民主主義」では二〇世紀ベネズエラの政治体制とその発展の歴史が分析され、同国の民主主義の危機の中で登場した新しい政治主体としてチャベスが位置づけられている。ミクロナサン・ミジャンの黒人文化復興運動をマクロナベネズエラの政治経済の変化と関連させて論じており、興味深い。

(むらい)ともこ/アジア経済  
研究所図書館